

回 覧



値小だより

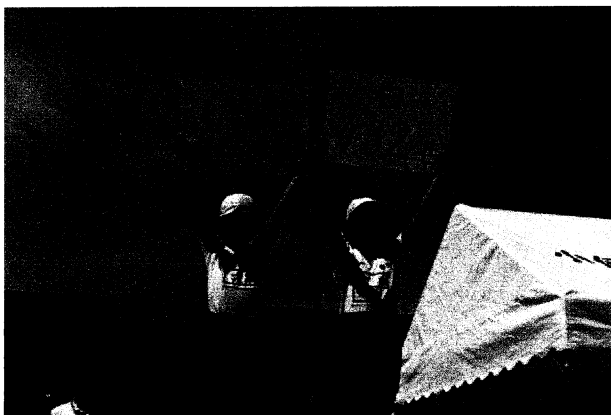
島から日本一楽しい学校を
～子どもが未来に誇れる学校～

平成29年 6月 14日 第6号
校長 酒井 元治

かっこういい負け方

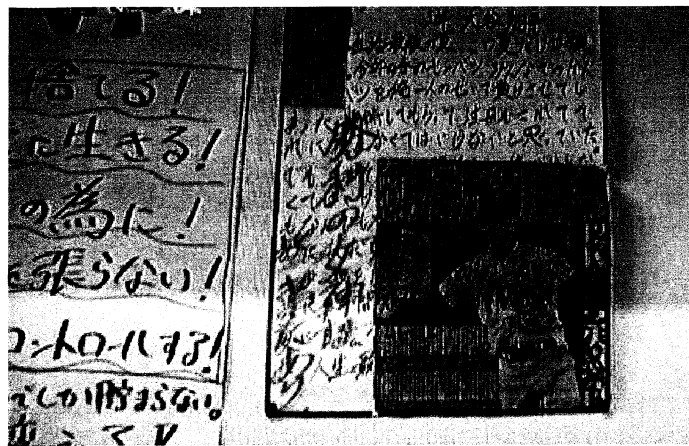
6月1日(木) 全校朝会の講話より

前回の値小だよりも書きましたが、今年の運動会も高学年、特に6年生の活躍が光りました。最後は接戦、わずかな点差で赤組の優勝となりました。私がこの運動会で一番印象的だったのは、白組のすごく悔しそうな表情と歯を食いしばってこらえている顔でした。ここまでを懸命にがんばった者だけができる悔しそうな顔。このことを子どもたちに話さない術はないと思い、全校朝会で「かっこういい勝ち方、かっこういい負け方」と題し、話をしました。



講話では最初に運動会でのそれぞれのがんばりと高学年の活躍を讃えました。その後、運動会の勝敗に話を向け、「かっこういい勝ち方、かっこういい負け方」について考えてみようとして投げかけました。

さて、まずは「かっこういい負け方」というのがあるか？ここでは、現在日本ハムファイターズの大谷翔平選手の話为例に挙げました。大谷選手は花巻東高校2年の全国大会(甲子園)で150km/hの剛速球を記録、全国で期待される選手となります。しかし、3年生の春、全国大会の初戦で強豪、大阪桐蔭高校と対戦。当時、大谷選手と人気を二分していた藤浪晋太郎選手(現在阪神タイガース)から本塁打を打つも、ピッチングとしては制球も乱れ、9対2で大敗します。その後、大谷選手はこの試合の新聞を寮の部屋の壁に貼り付けます。新聞には「藤波の勝ち」と大きなタイトルが目立ちます。自分の勝った試合ではなく、大敗した試合の新聞です。そして、この日の悔しい思いと今後の決意を新聞の上にマジックで書き



て、夏の大会に臨みました。書いた文字は「みんなでつかんだセンバツを俺一人のせいで負けさせてしまった。注目されてそれに応えなければいけないと思った。でも、…」というものです。この夏は地区予選でアマチュア野球史上初となる最速160km/hを記録するも、決勝戦で敗退。高

校最後の全国大会の切符を手に入れることはできませんでした。しかし、この3年生の春の悔しさがあったから今のマスター、大谷翔平選手があるのでしょうか。

この話を終わって、「この大谷選手の負け方はかっこう悪いか？」と聞くと、子どもたちは「かっこういい」と返事。「じゃあ、かっこう悪い負け方ってどんなのだろうね？」と問いかけると、出てくる、出てくる。「すねる」「人のせいにする」「勝った相手をなじる」「ズルをして勝とうとする」などです。

「反対に、勝ったけどかっこう悪い勝ち方ってあるの？」と尋ねると、「やたらと自慢する」「負けた相手をけなす」「ズルをして勝つ」などが出されました。

最後は、運動会でみんなが、特に高学年が見せてくれた態度は、「かっこういい勝ち方、かっこういい負け方」だったことを確認し、5・6年生に「ありがとう」の拍手を贈りました。

学校では、様々な勝負事があります。もちろん勝つこともあれば、負けることもある。どちらも大切な経験です。いわゆるプチ成功とプチ挫折。その経験を十分にさせてこそ自信もつけば、根気強さも生まれると思うのです。

被爆体験者講演会のご案内

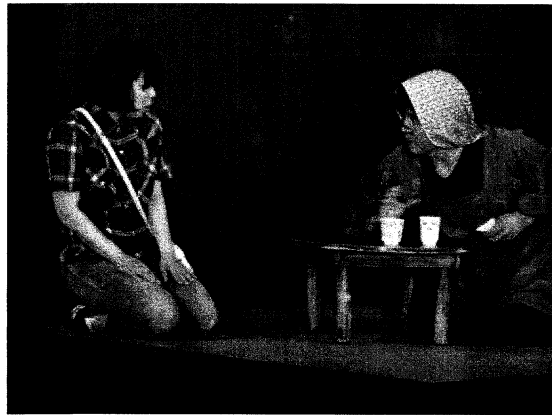
長崎原爆の被爆者の皆様の高齢化が進み、被爆の体験談を生で聞く機会が少なくなる中、わざわざ長崎からご来校いただき子どもたちに講話をしていただきます。保護者の皆様に限らず、島民の皆様のご参加をお待ちしております。

日時 6月21日(水) 10:30~11:30

場所 小値賀小学校 体育館

講師 小峰 秀孝 氏

(長崎平和推進協会所属 4歳で爆心地より1.5km地点で被爆)



青少年開催(〜o〜)

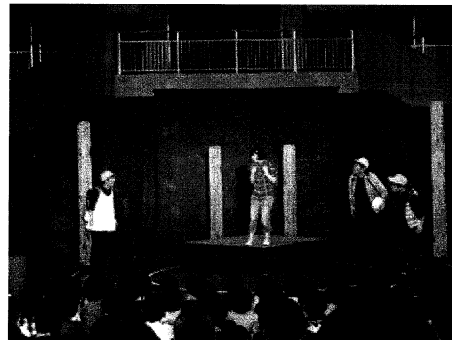
12日(月)、県教育委員会主催の青少年劇場が開催されました。この青少年劇場は前年度に希望し申し込むのですが、佐世保市や長崎市では、申し込んでもなかなか当選はしません。他地区では、1校だいたい5年に1回ぐらいの割合でしか開催されないものですが、離島のため

か小値賀では毎年何かしらの文化事業が開催されます。昨年度は寄席でしたが、今年は児童劇です。

劇団風の子九州から4名の団員のみなさんが来校され「やだ、やだ あっかんべー!」という劇を演じてくださいました。内容は次のようなものです。

山間に住む一人暮らしのおばあちゃんの家で、引っ越してきた4年生の女の子智(とも)とおばあちゃんのぼけを理由に裏山を売ろうとしている智の母。でも、智は引っ越してきたくはありませんでした。すごい田舎だし、お化けみたいなおばあちゃんがいるし…。少し内気な智は、おばあちゃんとも転校したばかりの小学校にもなじみず、学校に行かなくなってしまう。ある日、おばあちゃんの家を探検していると声が聞こえます。ぼけてしまったおばあちゃんの独り言かと思っていると、おばあちゃんや子どもたちにしか見えないあまのじゃくの登場。おばあちゃんの裏山にはたくさんの妖怪たちが住み着いているのです。出てくる妖怪はサトリ、あまのじゃく、狐、人面樹、カッパ。そして、裏山の守り神、土蜘蛛。土蜘蛛は裏山が売られる話を耳にして怒りを人間や人間と仲のよいあまのじゃくに向けます。内気だった智が勇気を出して友だちと一緒にあまのじゃくや裏山を守るという話でした。

私が数えたところでは14人の役があったのですが、これを4人の劇団員でこなされました。一人何役もやっているとは思えないぐらいの変わり身の速さと、演技の幅の広さに大人も十分に楽しめました。こども園の園児や中学生も一緒になっての鑑賞でしたが、ちょっと癒される時間とすばらしい演技力は、子どもたちに表現の面白さや人前が出る勇気をいただいたように思いました。



WORLD GUEST IN 小値賀小

この値小だよりも再三お伝えしておりますように、これからの子どもたちにつけて欲しい力の一つに誰とでも関わり合えるコミュニケーション力があります。それは、日本人に限らず外国の方とも。このこともねらって、小値賀小学校では外国のお客さんも受け入れるようにしました。計画としては数ヶ月前からしていましたが、今回が初めての受け入れになります。外国からのお客さんは、「島宿御縁」さんでアルバイトをしながら長期滞在をするいろいろな国のみなさん。御縁の岩永さんにご協力を得ながら、給食から昼休みまでを子どもたちと一緒に過ごしてもらおうというものです。私はこの取組を「ワールド・ゲスト」と名付けて子どもたちに紹介しました。

初回のゲストは、アメリカ出身のサマンサ先生(高校から来ていただいているALTのサミー先生と一緒になので小値賀でのニックネームはサム)です。1年生の教室と一緒に給食を食べてもらい、昼休みは運動場で鬼ごっこをしてもらいました。子どもたちは、どうにかしてコミュニケーションをとろうと知っているだけの英語を使ったり、ジェスチャーで表現したりします。初対面の外国の方とも関わろうとする姿勢が子どもたちを育ててくれると思っています。



この1年生との交流のちょっと前に各学級をのぞいてみると、5年生が習字をしていました。急遽、「ゲストに習字の体験をさせていい?誰か教えてくれる?」と言うと、「はい、はい」多数の子が立候補。今回は森岡君が先生に。何を書きたいか聞くと「school」という返事。平仮名で「がっこう」と書いてみました。

帰りに御縁さんまで送っていく車の中で、日本の学校の印象を聞くと、彼女はベトナムの小学校や大学で英語の講師をしたことがあること、ベトナムの小学校はうるさかったが、小値賀小の1年生は行儀がよく、とてもかわいかったことを英語で教えてくださいました。この程度は私も聞き取りができたようです。子どもたちに負けないように、私もコミュニケーション力をつけなければと思うところです。御縁さんのご協力により、学校の出費が給食代だけですむ、安上がりだけど他にはない出会いの場になっています。

